

---

# 真夏の椿事

kakio

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真夏の椿事

### 【ZPDF】

Z5066F

### 【作者名】

kakio

### 【あらすじ】

10年ぶりにかかつて来た突然の電話に驚きながらも少年時代を過ごした街へ再会を果たしに行く。

駅を出ると今までいた生活空間とは異質の場所へ来た気がした。この場所へ来るのは10年ぶりのことと少年時代を過ぎた記憶による感傷がそうさせたのかも知れない。

電車で40分程揺られれば辿りつくこの場所に、何故か足が向かなかつた。

親の転勤だかなんだかで慌しく未知の場所に向かう事になつた頃の僕は12歳で、そういう境遇におかれた少年が大抵思うように期待と不安を半々くらい胸に抱えていた。

というのは嘘で、正直に言えば引越しなんでしたくなかった。親しい友達もいたし、好きな娘もいた。何故この小さいながらも自分なりに築いてきた親密な世界を手放さなければならないのか理解できなかつた。

今から思い返せば、電車で40分程で到着する場所にわざわざ移った理由がよく分からぬ。親にどうして?と聞けばよかつたのだろうが、通勤が楽だったから、とか他愛のない理由だったに違いない。今さらどうしようもない。どうせ子供にできることなんてありやしなかつたのだ。

というわけで、そういうどうしようもなさを煽起こしたくないがために、こちらに足を向けるのを拒絶していたという感じは否めない。我ながらしようもない理由だ。

空には雲ひとつなく、太陽が我がもの顔をして地上を蒸発させようかとするように命一杯光を放射していた。

冬の間に忘れ去られてしまわないように人々に何かしらの痕跡を残そうかとするような切実としたものすら感じさせた。

今日、この町に来たのは唐突に懸かつてきた電話がきっかけだつた。

僕は郊外に台風が来たら空の彼方に塵となって消えてしまうんじやないかと言うようなボロボロの築30年という一軒家を借りて住んでいた。日当たりが悪くて常にジメジメした陰気な家だったが、アパートでそれ程大きな音量で音楽をかけていたというわけでもないのに、隣の大学生がうるさい！ とドアを蹴りあげていくのを3回我慢した後、4回目にキレまくつて飛び出していった僕の顔があまりに尋常なものじゃなかつたのか逃げ出した大学生の背中にドロップキックをかました後に何もかもが嫌になつて、多少割高でもいいからとにかく一軒家をと賃貸マガジンを片つ端から買っこんでどうにかこうにか探して見つかつた所なので割と氣に入つていた。

そのボロッちい家でニルバーナを聞きながら、もしかしてあの大学生は音が大きいのが気にいらなかつたわけじゃなく、ニルバーナが病的に嫌いだつたのかもしかして？ とふと思いついている日曜日の昼下がりに電話が鳴つた。

「何やつてる？」 10年間話していない事などまるで架空の出来事のように今日暇だから遊ばない？ といつような気軽で親しみのこもつた声だつた。

「あの、どちらさまでしょうか？」 僕は友人の声を瞬時に複数思い起こしたが、該当するものはひとつとしてなかつた。間違い電話？

「おいおい、酷いな。俺だよ。忠司。津田沼忠司。忘れちまつたのかよ？」 もちろん覚えていた。声が記憶より1オクターブくらい低くなつていた。

「そんなわけないよな。とにかく次の日曜日に俺のマンションに来いよ。住所変わつてないから。ほんじゃな」

ガチャン。ツ――――――。相変わらずだな、と思つ。自分の用件を告げると有無を言わさずにそれを否定する事など許されない、というか言つても聞きやしないだろう。

どうやって電話番号を知つたのか？ どのような理由があつて連絡をしようと思つたのか？ 何故今なのか？ 考えれば考へるほど

わけがわからなくなつた。忠司とは僕が引っ越すまで確かに一番親しい友達だつた。だけど、などと考へても答へは出るはずはなかつた。僕とつむんでいた頃の忠司を思い起しにせば。

僕等が知り合つたのは確か小学3年生の頃だつた。僕はその頃、昆虫に夢中になつており暇があれば家から10分程の原っぱに昆虫狩りをやりに行つたものだつた。季節は初夏で、そこらの名前の分からないボーボー生えている草を踏みしめるとやはり名前の分からぬ縁っぽいちつこい虫がパツと飛び散つた。そこらに落ちている棒切れを拾つて、片つ端から草叢をなぎ倒しながら虫を大量に飛翔させていた。ちぎれた葉っぱから独特のにおいがした。

背後からパンパンパンパンと凄まじい轟音が聞こえた。驚いて振り向くと忠司がニヤニヤ笑いながら僕を眺めていた。

「ちよつと来いよ」。僕はかなりの警戒心と恐怖心を抱きながら黙つていた。轟音のおかげで、体がすくみあがつていた。

「いいからこいつちこいつてば」。さつきより少しばかり脅迫を含んだ声で相変わらず唇を歪めながらついた。足に杭を打たれたみたいに一步も足が動かない。

「来い」。手にライターと見たことのない物をちらつかせながら言つた。もうお前に猶予はないんだと言うように。

僕は何とか一步を踏み出し、油の切れ掛けた機械みたいにぎこちない歩き方で忠司のほうに向かつた。余程、おかしな歩き方だつたのか、忠司は笑いを堪えきらずに爆笑しだした。

「そうびびんなよ。お前をどうこうしようつてわけじゃないんだからよ」。僕は流石に少々むかつ腹が立ち、「びびつてなんかないよ」と言つたが、貧弱なビブラーを掛けたような声がでてきて思つた。絶対、俺びびつてる。

おかしくておかしくて堪らないように笑いを堪えながら「ま、お前がいうならそうなんぢやない」。忠司の目を覗きながら、という

より逸らせなかつたわけだがテクテク歩いて接触まであと3メートルと言う時、「ちょっと待つ。それ踏んじやうぞ」。忠司の視線を辿つていくと地面にカエルがいた。野球の硬球を一回り大きくしたぐらいの大きさのカエルで、頭を何度もコンクリートの壁に叩きつけたみたいにひしゃげていた。ひしゃげていたと言うより、何か耐え切れないものを抱え込んで内から破裂したと言つ方が適切かもしない。体全体に穴が開き、粘着質の液体をびちゃびちゃと噴出していた。手足全てがちぎれてなくなっていた。

「これだよこれ」。忠司は右手を突き出して手のひらに乗つてゐるものを見せた。「爆竹だよ。お前見たことねえの？　これをよカエルを一警して「こいつの口ん中突つ込んで破裂させたんだ」。縦1センチ、横5ミリほどのダイナマイトを縮小したようなものが真ん中の導火線から20個ほどくつついていた。

「そんな棒切れでトンボ打ち落としてるより、ずっと楽しいぜ？」  
。僕がトンボやらバッタやらを棒切れで叩き落としていたのをどこかで見ていたのだろう。彼はどうやら昆虫虐殺の類の仲間をスカウトしたいらしかった。「見てろ」。忠司は屈みこんで、爆竹を5個ちぎり、5本の短い導火線を器用にひとつに繋げ哀れなるカエルの口に突つ込んだ。ピクピク動いているところを見るとまだ生きているようだ。更にポケットから導火線を延長する為にティッシュペーパーを捻つて継ぎ足して、ライターで火を点けた。「離れたがいいぞ。結構飛び散るから」。ティッシュが導火線に辿りつく1分ほどの中、僕らは無言でカエルを凝視していた。ティッシュが燃えつき導火線に火が渡ると1秒も経過しない内に「パパパーン」と畳み掛けるように音が重なつて耳をつんざくのとほぼ同時にカエルが踊るように宙を10センチほど舞つた。頭がちりぢりになり、下半身しか残つていなかつた。もはや、カエルにはとても見えなかつた。それでもピクピク動いていた。

「どうだ？　おもしろそうだろ？」

僕はすぐさま忠司と同盟を結んだ。

忠司のマンションは駅に向かい合っている道路からまっすぐ歩いていけばよかつた。約2キロといつていいだ。熱さで汗が吹き出る。懐かしき商店街を潜り抜ける。この店まだやつてんのかとか、おいこのしけた商店街にこんな立派な店似合わないんじゃない？とかあの何所のローン店だかわからぬコンビニまだやつてんのかとか人事の様に思いながら。

田頃、あまり運動しないせいか眩暈がしてきた。あの頃はこのぐらいの暑さ走りまわる事ぐらい何でもなかつたよな、とかどうしても感傷的な気分になつてくる。久しぶりだからな、それに全ての責任を押し付けて感傷に浸る自分を正当化しながらゆっくりと歩いていく。

忠司のマンションが見えてきた。6階建てで、道路を挟んで向かいに同じく6階建てのマンションが建っている。よくそちら側でピンポンダッシュをやりまくつたものだつた。一度だけ、本気でキレた20代ぐらいの男に追いかけられた事があつた。そりや30回もピンポンピンポンやられりや切れるだろうと今なら思つたが。忠司に蹴りを背後から食らわせ、僕にげんこつをお見舞いした後、散々説教をして帰つていつた。もちろん、僕らがその位でへこたれるわけがなく、ドアの前で爆竹を30発ほど破裂させてリベンジを果たした。コンクリートに音が反響して凄まじい音を発していた。その後、どうなつたつけな・・・

「何物思いに漫つたような顔してんだよ。三階のベランダで煙草を吸つている忠司が、僕に向かつて声をかけた。電話と同じよう10年という時を感じさせない自然な感じで。

「いや、なんでもないよ。何号室だつけな？」「303」。僕は狭い階段を使って三階まで上がり、狭い通路を歩きながら「津田沼忠司」と言ひ表札が出ているドアを見つけて正面に立ちインターホンを鳴らした。ガチャリと鍵を外した音が聞こえ、ドアが開いた。出て来たのは綺麗な女性だつた。同じ年ぐらいで白のワンピースが

似合いまくつている。街ですれ違った後、思わず田で追つてしまつ

ような素敵な女性だつた。何所かで見たことがあるような・・・。

「すいません。間違つたみたいですね」。女性は笑いを堪えられな  
いようにドアを閉めた。バタン。僕は303と言う数字をじっくり  
見てここで間違いないと確信し「津田沼忠司」と表札が出ているこ  
とをもう一度確認する。混乱する。301号室から305号室まで  
の表札を全部確かめる。間違いない。

僕はわけがわからなくなりながら、もう一度303号室のインタ  
ーホンを押す。ガチャリ。ドアが開く。女性が出てくる。大笑いし  
ながら。

「あの、こちら津田沼忠司さんのご用件ですよね?」「違います  
けど?」「すいません。また間違つたみたいですね」。バタン。僕の  
混乱は最高潮に達していた。さつきベランダに忠司いたよな? お  
いおい、暑さにやられて幻でも見たつていうのか? 勘弁してくれ  
よ。303号室の前で立ち尽くしているところで階段の方から「久  
しぶりだな一樹」と言つ声がしてそちらの方を向くと忠司が笑いな  
がらこちらに歩いてくる。

「悪いな。ちよいと煙草が切れて買ひに行つてたんだ。どのくらい  
待つた?」。僕はかつてないほど奇妙な顔をしていたに違いない。  
お前さつきベランダで煙草吸つてたじやないか? 「何て顔してん  
だよ? そんなに待つたのか? たかが10分ぐらいでそう怒るな  
よ。10年に比べりや大したことないだろう」と笑いながら303  
号室の鍵を開け「汚いけどまあ入れよ」と言つた。

部屋は3部屋あつて、3畳ほどのキッチン、6畳ほど居間、3畳  
ほどの忠司の部屋となつていた。綺麗とはいえないが、汚いと  
も思えなかつた。先程見た女性は影も形も見当たらなかつた。

「おい忠司。お前女と暮らしてん?」。聞かずにはいられなかつ  
た。「何言つてんだよ。しがない一人身だよ俺は」。冷蔵庫からビ  
ールを取り出して、僕に放る。

「わけのわからない事いつてないでとりあえず再開に乾杯だ」

僕と忠司は飲みに飲みまくつてへロヘロになりながらもさらに飲み、冷蔵庫の中のビールがなくなるとジャックダニエルズをあけ、ロックでさらさらになに飲みまくり、ボトルを全部開けてしまつと近くのディスカウントショップに肩を組んで買いに行き、店員から何だこいちは？ という顔をされたところで忠司が教育がなつてないなーこの店は！ と叫んで取つ組み合ひの喧嘩になりそなところで僕が謝り、ビールを3ダースほど買つてまた部屋に帰つて飲んだ。

「一樹くん、あんまり変わつてないよね。つていうか全然変わつてないよ」和美はほろ酔いで少し赤い顔をしながらそう言つた。

和美？ 僕が當時好きな子だった。

「そりやそうだよ。人間ある物事に関しては決して変われやしないんだ。あの頃みたいに昆虫やらカエルやらザリガニやらを吹つ飛ばしたりはしないけどさ。そういうのは、繰り返していくうちにある一定のポイントになると止めちまうもんだけ、変わらないものはやっぱり変わらないんだよ」

「どうして俺たちに何も言わないままでなくなつたんだ？」忠司は言つた。

「お前が引っ越したあの日一人で約束してたよな？ 和美にビッチが好きか確かめようって」

「それに関しては悪いと思つてるよ。でもな、俺は本気でここから離れたくなかったんだ。それだけは本当だ。お前と和美から離れる事に我慢できなかつた。俺に何が出来た？ 何にも出来やしねえよ。がたがた離れたくないとかいつてお前等に迷惑掛けるぐらいなら何にも言わずに消えた方がいいと思つたんだよ俺は」

「お前そういうところ未だにかわつてないだろ？」

「変わつてないよ。言つただろう。ある種の物事は変えようがないんだ。いくら努力してもな。自分じゃどうしようもないこと、ひとつやふたつやみつづぐらい誰だつて抱えてんだろうが」

「こういう事聞いてくれる人他にいるの？ 何で変えられないんだって悩んでたこと他に聞いてくれた人いる？ 私たち以外に？」

「いないよ。俺はそういう物事を一人で抱え込んでいいように強くなろうと努力してきた。それはある程度成功したよ」

「それは逃げじゃないの？ 一人で抱えこんで強くなろうとしたつていうけど、それは強くなつたんじゃなくて人と向き合つたら逃げることによつて得た物じゃないの？」

「そうだとしても俺はそれは一つの達成だと思つてる」

忠司と和美は服を脱いでセックスを始めた。忠司は言った。

「これがお前が選択もせずに逃げ出して残つた現実だよ。俺は和美を手に入れた」。和美は恍惚の表情をしながら目をつぶつて甲高い喘ぎ声を上げている。

「お前に今なにがある？ 心から話せる友達もない。愛している恋人もいない。仕事もやりたくもない退屈な酷いもんだって投げたようにやつてる。ゼロだろ？ そういう関わりを避けてきたお前は空白だろ？ なあ？ 何とか言えよ一樹」。僕は無言で一人の性行為を眺めていた。

「一樹君。裸になりなよ？ 鎧着込むみたいに頑なになんないでさ。一緒にやろうよ」

ブラックアウトだかホワイトアウトだか頭に何らかのショックを受けたように服を脱ぎ捨て一人に混ざる。

僕等三人は一晩中馬鹿みたいに延々と交わり続ける。明日世界が終わるんだ。ある意味では。

黒と白のせめぎ合いを頭に感じながら僕らは果てることのない交わりを延々と繰り返し続けた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5066f/>

---

真夏の椿事

2010年11月21日15時07分発行